

幸せも禍もすべては心の持ち方

年号が令和と変わり、新しい時代の幕開けに期待した喜びもつかの間、新型コロナウイルスの世界的な蔓延は、経済はもちろん、私たちの日々の暮らしにも大きな影響を与えました。

特に、社会生活については、半ば強制的なりモトワークが始まると、出社しなければ仕事ができない、直接会わなければ議論できないといった考えを覆し、労働の意識が大きく変わりました。

長時間労働の是正や柔軟な働き方の推進は、忍耐、忠誠、連帯意識など、日本人の勤勉さ故に法制化されても改革が進まずにいたため、コロナ禍を契機に、当たり前のことがいかに脆いのかを全ての人を感じたに違いありません。

また、学校現場では、GIGA スクール構想が加速し、インターネット環境や一人一台端末等のインフラが整備されると、停滞していた教育のICT化が急速に進み、オンラインでの授業配信など、学びのスタイルが一変しました。今や、学問への興味・関心を高められるデジタル教材は、ハイレベルな教育を可能としています。

一方、日常生活においては、密を前提とした行動への制限、黙食、マスクの着用など、日々の暮らしを営むための社会規範が変わるだけではなく、感染症により多くの命が奪われたり、働く職場や機会を失ったりしました。それでも、私たちの感じる幸福度が以前よりも高まっているのは、健康でいることや働く場所があることへの感謝からでしょうか。それとも、テクノロジーを使いこなしているようで、実は、私たちが振り回されていたことに気付かされたからかもしれません。

あらためてコロナ禍以前を振り返ると、科学技術の進歩により、過度な利便性や目先の効率性と引き換えに、自分らしさを見失っていたのではないかと感じます。感染防止対策とはいえ、不便な新しい生活様式が定着すると、私たちの日常は、誰かの努力に支えられて成り立っていることをあらためて実感することとなります。いい大学、いい会社であれば幸せな人生が待っているなど、肩書や世間体を基準に信じられていた人生観は、経済的な豊かさが幸せではないと感じることで、絶対に無理ではないかと思われていた開かずの扉を動かしたと言っても過言ではありません。

結果的に、感染症による禍は、経済的な仕組みや学校の在り方に一石を投じただけでなく、誰もが生き方をスポイルすることなく、自分らしさを見直すことができたのは、大きな成果だと言えるでしょう。これからの社会は、人工知能や産業ロボットに仕事を奪われ、生活さえも支配されてしまう可能性があることから、等身大でありのままの自分を大切に作る生き方は、この禍事（まがごと）を経験したからこそ身に付いたものであると信じてやみません。

令和6年8月、私は、岐阜県で開催されている全国高等学校総合文化祭へ出かけました。昨年、東京都高等学校文化連盟書道展で教育委員会賞を受賞した本校生徒の作品が出展されており、実際の作品に触れることを心待ちにしていました。書道部門会場に着くと、各都道府県の代表作品が多数展示され、どの作品も圧巻の一言でした。その中でも、一際大胆かつ躍動的な文字で書かれた本校生徒の作品「**人生福境禍区、皆相念造成**」が目に入り込みました。その横には、「人生の幸せも禍も全ては心の持ち方だいたいである、という言葉をも今の私に伝えたくて作品を書きました。」と制作意図がコメントされていました。

人類を脅かす感染症のパンデミックは、生徒にとって大切な中学、高校の青春時代を思う存分に過ごすことができない禍となりました。しかし、意識を変えれば、自分らしい生き方ができる社会が拓けたのかもしれない。日々の生活においても、勉強や部活、友達との関係がうまくいかないから、自分はダメな人間だと落ち込んでしまうことは、誰にもあると思います。

しかし、うまくいかないことを繰り返す中でも、心の持ち方一つで今までとは違う自分らしさを見い出すこともできるはずです。

私は、荒々しく書かれた生徒の作品を食い入るように何度も読み返しては、禍福倚伏な自分の人生を振り返ると、幸せとは、満ち足りることではなく、今までとは違う新しい自分に「気付く」ことなのだを受け止めました。一文字、一文字に込められた思いは、学びの匂いとなっていていつまでも私の心を捉えて離れませんでした。

令和6年8月

